

Title	The Dynastsの一考察 : Immanent Will, Spirits, Man の関係をめぐって
Author(s)	藤田, 繁
Citation	Osaka Literary Review. 4 P.67-P.74
Issue Date	1965-09-30
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25802">https://doi.org/10.18910/25802</a>
DOI	10.18910/25802
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# *The Dynasts* の一考察

## — Immanent Will, Spirits, Man の關係をめぐって —

藤 田 繁

以下の論考の目的は、ハーディの中心思想を、新しい二つの視点から究明することにある。その視点の一は、中世的世界像であり、また一は、精神分析的人間像である。*The Dynasts* には、これら二つの、いわば、伝統と革新の化合物ともいうべき世界が広がっているのであり、この叙事詩劇に盛られた思想を解明するには、是非ともこれら二要素を分析し、かつその後に再び統合されねばならない。

### I

「ディナスツ」の世界の広大性の一端は、中世のキリスト教的世界像によっている。なる程、地中海やアルプスやロシア大平原が「ディナスツ」の広大な舞台となつてはいても、それは平面的広がりであつて、立体的の広大性は、中世の宇宙像の名残りによつて与えられているのである。「ディナスツ」最終場の「哀れみの精」による、Immanent Will への祈り

— *The systemed suns the skies enscroll / Obey Thee in their rhythmic roll, / Ride radiantly at Thy command, / Are darkened by Thy Masterhand!*<sup>①</sup> —

この一節は、この宇宙像の下敷がなければ、書かれ得なかつたであろうし、理解もまた出来ない。この叙事詩劇には、他にも、中世的世界像の残滓が到る所にみられるのである。そして、その中で最も重要なものが、God—Angels—Man の序列と、Immanent Will—Spirits—Man の序列間の対応である。「哀れみの精」が Immanent Will に対して、“*To Thee whose eye all Nature owns, / Who hurlest Dynasts from their thrones, / and liftest those of low estate / We sing, with Her men consecrate!*”<sup>②</sup> と歌う時、Luke 1/52の “He hath put down the mighty from *their* seats.” の He と対応する *Thee* は、明らかにキリスト教のいう神である。「哀

れみの精」に限らず、「年の精」が Immanent Will について言及する言葉、the Cause, the Master-hand, the All-prover など、それが一方では神の属性を持っていることを示している。次に Spirits を天使と考えることに対しても、その妥当性は十分に証明されるであろう。Spirits の属性の多くは天使と同じである。即ち、彼らは、天使と同じく、天に住み、精神的なものであり、人間の気持を読みとることが出来、Spirits のあるものは完成した悟性を持ち、知識にめぐまれ、未来の事象や事物に対する予知の能力も分に応じて持ち、物を創造することは出来ないが、外面的に被造の事物に働らきかけることが出来る。また、ゼカリア一章九節「我が中に語りし天使我に言ひけるは……」や、マタイ一章二十節「主の使、彼が夢に現はれて云ひけるは……」<sup>⑤</sup>にあらわれる天使の如く、Spirits も、人間の心の中や夢の中に現われ語るのであり、彼らにも、不完全ながら、階位があり、その全てが Immanent Will によって活動を制限されているのである。人間についても、「ディナスツ」の中の人間は、Immanent Will によって支配され、Spirits によって見守られている点で、その被支配の性質を別にすれば、中世キリスト教世界の人間と同じである。以上わたくしは、God—Angels—Man の序列と、Immanent Will—Spirits—Man の序列との類似性を立証する為に、互いの共通点のみを陳述した。しかし一方、両者の相違点に目をやるとき、重大な変化を見出すのである。聖トマスは、「神は善であり、神自身の善性である。神は、あらゆる善の善なのである。神は知的であり、その知性の行為が神の本質である。神はみずからの本質によって理解し、己れ自身を完全に理解している。」<sup>⑥</sup>と述べている。これは Immanent Will と殆ど正反対といってもいい属性である。ハーディの「内在意志」は、「これまで通り、環境のきじに永遠の織物を織り、うっとりとして、芸術家気分ひたりながら、機械的にそこに織り出す模様こそ、その唯一の無関心な目的のようで、結果が目当ではないよう」<sup>⑦</sup>なのであり、その上、死後の世界に無関心なものも不思議なことである。また、Spirits と、いわゆる天使との決定的な相違は、後者が、墮落した天使は別として、常に神をうやまうのに対し、前者は常に Immanent Will の観察者であり、批判者である点にある。さらに人間も、正統キリスト教の世界では、自由意志が与えられているのに対し、「ディナスツ」の中の人間には、通常、自由意志は否定されている。

いな、ミラノでナポレオンの戴冠式をみながら、「年の精」が、「哀れみの精」の質問「この派手な儀式はどういう教えによって行われているのですか？」に対して、「キリスト教と呼ばれる地方的な宗旨だ。それも、他の宗教と同じく、回転する天体の荒々しい劇に挿入されたもので、影の薄い、哀れな、はかない狂言なのだ。キリスト教の短い生命を超越して、超然無関心に、組織だった星辰は、多数の生物を宿す遊星の群を引従えて、数学的に正確な軌道をおやみなく堂々と運行しているのだ。」と答えるとき、正面きっては、キリスト教も、キリスト教的世界像も否定されているかに見える。我々は、「ディナスツ」の精神的背景に、中世のキリスト教的世界像を見てとったのであるが、しかし、それでもって説明出来ぬ部分が大き過ぎるのに気が付く。そこで、これらの剰余を更に説明し切る新しい視点が要求されるのであり、私はそれが精神分析の人間像だと考えるのである。

## II

「ディナスツ」は、心理学的視点よりみると、巨大な人間精神構造の物語りである、と考える。更にはっきり云えば、Immanent Will—Spirits—Man の性質が、フロイトのいう Es—Über-ich—Ich、即ち、エス—超自我—自我のそれと対応すると思うのである。フロイトがエスの属性とするものが、大部分ハーデイの Immanent Will にもあてはまる。Immanent Will も、エスと同様、「無意識的」、「原始的」、「非合理的」<sup>⑦</sup>、「無道徳的」<sup>⑧</sup>であり、「論理的思考法則は通用せず」、「何ら評価ということを知らず、善悪も道徳も知らない、搬出を渴望している本能備給」<sup>⑨</sup>である。しかも、Es の英語に当る It で呼ばれるのである。同様に、「the flower of Man's intelligence」<sup>⑩</sup>である Spirits は、「自己観察・良心及び理想機能の役割」<sup>⑪</sup>をもつ超自我に、また、feeling と consciousness を持つ man は、「意識であり」<sup>⑫</sup>、「知覚—意識系の中核と見なされる」<sup>⑬</sup>自我に対応する。このアナロジーは、エス—超自我—自我間の力動的関係と、内在意志—精霊—人間間のそれが対比されるとき、一層正当化されるのである。勿論、両者が正確に一致することはあり得ないが、その類似性は、「ディナスツ」が内包する意味をより正確に教えてくれるのである。先ず、構成の仕方が同じである。超自我も、自我も、エス

の変化したもので、結局はエスに含まれるのに対し、Spirits と Man も Immanent Will の一部である。また、相互作用のしかたもよく似ている。フロイトは自我について次のように云っている。「自我は三様の奉仕をしなければならず、その結果、三様の危険におびやかされている。すなわち、外界からの脅威、エスのリビドーからの脅威、超自我の厳格さからくる脅威である。……自我は、境界に住むものとして、世界とエスとのあいだを仲介し、エスを世界に順応させ、筋肉活動によって世界をエスの願望に<sup>④</sup>応ぜしめる。」と。「ディナスツ」でこれに当る具体例は、ウォータールーで大敗した後のナポレオンであろう。Bossu の森の中で、独り馬上に疲れ切つて眠り込んだナポレオンに「年の精」が話しかける：“*Thus, to this last, /The Will in thee has moved thee, Bonaparte.*” これに対し、驚いて目を醒ましたナポレオンは、“Whose frigid tones are those, /Breaking upon my lurid loneliness/So brusquely? ... Yet, 'tis true, I have ever known/That such a Will I passively obeyed!” とつぶやく。その後再びまどろむナポレオンに、Spirit Ironic がまた執拗に責める。ナポレオンは、“O hideous hour, /Why am I stung by spectral questionings?”<sup>⑤</sup> と叫んで、ながながと、破れ去った己れの夢を回想するのである。ここに、エスとしての Immanent Will も、超自我としての Spirits も、自我としてのナポレオンもよく表われている。天使の所で言及したように、Spirits は夢や意識がぼんやりしている時によく現われる。これも、超自我として解するとき、納得出来るであろう。超自我は、自我に較べて、はるかに深く無意識に根ざしたもののなだからである。同様に、Spirits が Villeneuve やナポレオンに自殺をすすめるのも、自己破壊衝動を押しつける超自我としての役割を果していると云えよう。

この同じ精神分析というメスは、ハーディの思想の中心的なものをさらに明快に解剖してゆける利点を持っていることに気がつく。そのひとつは、彼の evolutionary meliorism である。衆知の如く、‘Apology’ で宣言される前に、すでに何度か、いろいろな形で、この事はハーディによって述べられている。その最も有名なのが、「ディナスツ」の最後の言葉である。“*Consciousness the Will informing, till It fashion all things fair!*” このことについて、ハーディは1914年の手紙で次のように云って

いる：「推進力の中に無意識をみる考えは、無論、新しいものではありません。しかし、その無意識的な力がじょじょに意識化されつつあるという見解、即ち、意識が力の源の方にだんだんと反応を及ぼしつつあるという見解は（私の知るかぎり）「ディナスツ」が現われる前には提唱されていませんでした。」と。この考えは、要約すれば、Immanent Will は無意識である。所が Immanent Will の一部である人間は意識を持っている。従って、部分のこの趨勢が強まれば、Immanent Will も全体として意識を持つに至る、ということになる。これを私は、フロイトに従って、次のように解釈したいのである。即ち、エスは無意識である、所がエスの一部が変化して出来た自我は意識を持っている。従って、いずれはこの意識的自我が勢力をまし、エスは意識化され、我々は自身を自我のもとに統御出来るであろう、と。フロイトは次のように云っているからである：「精神分析療法の意図は、自我を強め、自我を上位自我から独立せしめ、自我の知覚分野を拡大して、自我の組織を完成し、その結果自我がエスの新しい部分を獲得し得るということにある。エスのあったところ、そこから自我は生ずるであろう。それはたとえばゾイデル海の干拓のような文化事業なのである。」と。ハーディの evolutionary meliorism はフロイトの「勇氣あるペシニズム」と一脈相通じているといえるであろう。

次に、ハーディのいう Free-will についても同じ方面から説明することが出来る。ハーディは1907年の手紙で、“... whenever it happens that all the rest of the Great Will is in equilibrium the minute portion called one person's will is free.” と述べている。ここにあらわれている in equilibrium という語句は、同じような context で、他の個所でも用いられている。‘equilibrium’ 即ち、‘equal balance’ とは、もともと、最初に述べた中世的世界像で頻繁に出てくる考えであるが、しかし、上の場合、私は、“all the rest of the Great Will is in equilibrium” を、エスと超自我が均衡を保っている、と解したいのである。その時、自我は自由なのである。

### III

以上私は、前半で、「ディナスツ」に於ける Immanent Will—Spirits—Man の関係が、中世のキリスト教的世界像に於ける God—Angels

—Man の関係と対応することを、また、後半で、それがフロイトのいうエス—超自我—自我の関係と対応することを指摘した。概略的に云えば、前者の対応は、いわば、能力の面に於いて、また、後者のそれは性質の面に於いて、ということが出来るであろう。(人間が Immanent Will に影響を及ぼし得るのは、その性質の面においてである。)つまり、*The Dynasts* の世界は、二重のフィルムから成り立っている。その一枚は、中世スコラ哲学によって確立された中世的世界像であり、他の一枚は、フロイト達の精神分析の人間像である。但し、ハーディにおいては、前者は歴史によって大きく変貌し、後者は、フロイト程に明晰あるいは機械的ではない。ハーディの Immanent Will が、基督教の神と如何に異なっているかは、フロイトのいう神の説明を読めば明瞭である。フロイトによれば、在来のキリスト神は、人間の心の中の超自我が投影されたものである。それに対し、ハーディの Immanent Will はエスの投影である。ただし、Immanent Will は、厳密には、フロイトのいうエスにユングのいう集合的無意識の性質が加わったもので、しかも、その内容はフロムの修正を必要とするものである。

さて、最後に、これら二つの事実を、ハーディ個人及び西欧思想史との関連において、如何に解釈すべきか、という問題が残った。私は、これを次のように考えるのである。即ち、それらは Immanent Will 観の中の、乱されるものと乱すものの二つの要素を指すのである、と。ハーディの幼少時代は彼にとって楽天的な調和の世界であったが、しかし、青年期を迎え、この調和は破壊され、以後それが確定的になってゆく。「ディナスツ」に現われた「内在意志」観は、この乱される以前のものと乱すものとの融合体、云いかえれば、彼の初期の楽天的要素と青年期以後の悲観的要素との葛藤の結果であった。そして、この「乱されるもの」を歴史的にさかのぼってゆくとき、ゆきつくのが、中世のキリスト教的世界像なのである。他方、「乱すもの」とは何かと云えば、それは19世紀の先端をきる思潮であり、それを歴史的に下ると、直ちに行き当るのがフロイトなのである。無論こう云うとき、フロイトを一つのアイデアの歴史の一点に位置づけることが出来るということを前提としている。因みに、Hardy と Freud は殆ど同時代であったが、直接に精神的交渉をもった形跡はなく、彼らの関係は、いわば、「前意識的血縁関係<sup>⑧</sup>」であった。さて、ハーディの内

部で、これら二つの要素は相争い、その結果、伝統的なキリスト神が「内在意志」へと移行し、更に、それより evolutionary meliorism が派生するわけであるが、この思想の動きは、実は、西欧思想史上の大きな流れと密接な関連を持っているのである。この推論に対しては、多くの例証を与えることが出来よう。例えば、A. O. Lovejoy は、その著 *The Great Chain of Being* で、以下の如く述べている：

So long as the two beliefs were held together, the seeming axiom to which I have referred--that the antecedent in a causal process cannot contain less than the consequent, or a higher type of being come from a lower--could still be precariously maintained. But with the end of that century (*i. e.* 18 c.) and the opening decades of the nineteenth these assumptions of the traditional theology and metaphysics began to be reversed. God himself was temporalized-- was, indeed, identified with the process by which the whole creation slowly and painfully ascends the scale of possibility; or, if the name is to be reserved for the summit of the scale, God was conceived as the not yet realized final term of the process. Thus for emanationism and creationism came to be substituted what may best be called radical or absolute evolutionism. . . . ④

同様の意見は、L. J. Henkin 著 *Darwinism in the English Novel 1860-1910* (New York, Reissued, 1963, by Russell & R.) にも見ることが出来る。青年時代に、妙なる「秩序」より遠く苦悩の懐疑の森に迷い込んだハーディには、もはや「住家」は崩壊してしまっていた。われわれは今、この Immanent Will 観に、人間精神の歴史に於いても、また彼個人の歴史に於いても、「住家なき」<sup>⑤</sup>生涯を生きてきた老ハーディが、再び、自己及び時代の「住家」をうち建てようとしている、いじらしくも悲壮な姿を見るのである。



- 1—2. *The Dynasts* (London, Macmillan, 1958), pp. 523, 522.
3. これら二文は、霜山徳爾氏の論文「天使とダイモン——聖アウグスチヌスをめぐって——」(「聖心女子大学論叢」第一集)において、聖書より引用されたものである。尚、天使については、主にアウグスチヌスの説に従った。
4. Bertrand Russell, *History of Western Philosophy* (London, George A. & U., 1962), p. 447より訳出。
- 5—6. *The Dynasts*, pp. 1, 32—33.
7. フロイト著、古沢平作訳「続精神分析入門」(日本教文社), 113頁。
8. フロイト著、井村恒郎訳「自我論」(日本教文社), 299頁。
- 9—10. 「続精神分析入門」111頁, 112—113頁。
11. *The Dynasts*, p. 137.
12. 「続精神分析入門」100頁。
13. S. Freud, *Two Short Accounts of Psycho-Analysis* (tr. add ed. by J. Strachey. A Penguin Book. 1963), p. 107より訳出。
14. S. Freud, *The Ego and the Id* (tr. by J. Riviere. London, Hogarth, 1962), p. 18より訳出。
15. 「自我論」302頁。
16. *The Dynasts*, III. VII. ix. pp. 519—20.
17. F. E. Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (Macmillan, 1962), p. 449より訳出。
18. 「続精神分析入門」120頁。
19. *Life.*, p. 335.
20. Thomas Mannの言葉。高橋義孝訳「フロイトと未来」(「フロイトの思想」(河出書房新社)所収), 8頁。
21. A. O. Lovejoy, *The Great Chain of Being, A study of the History of an Idea* (New York, Harper, 1960), p. 317.
22. 'hauslos' M. Buberの言葉。児島洋訳「人間とは何か」(理想社)参照。

付記. 本稿は日本英文学会第36回大会で行なった研究発表に加筆したものである。